

193 ○廬 ……①いおり。粗末な小屋。草廬。

194 ○終焉……命の終わり。一生の終わり。臨終。死。

『漢語大詞典』では「終焉之志」の項に、「在此安身終老的想法」と説明し、『晋書』「王羲之傳」の「羲之雅好服食養生、不樂在京師、初渡浙江、便有終焉之志」の一文を引く。

また、廬照鄰の「宴鳳泉石翁神祠詩序」の「形木雙枯、將有終焉之志」の一文を引く。

195 ○縱使……たとい。仮定の言葉。「縱令」に同じ。

ある条件を仮定しても、結果は変わらないという譲歩の意味を表し、「縱」は条件節の文頭またはその主語のあとにおく。「たとひ……(とも)」「たとへ」も許容される」と訓読して、「かりに……としても」と訳す。(『漢辞海』)

張謂の「題長安主人壁詩」に「縱令然諾暫相許、終是悠悠行路心」の句が見える。

『漢語大詞典』では「即使」と説明し、顔之推の『顔子家訓』「養生」にある「縱使得仙、終當有死」の一文を引く。また杜甫の「戲為六絶句之三」にある「縱使盧王操翰墨」の句を引く。

『菅家文章』にも以下のような用例が散見する。

▼「39 八月十五夕待月。席上各分一字一(四)」「縱使清光纔透出、當勝徹夜甚簷疎」

▼「364 早春侍内宴、同賦開春樂、應製」「縱使春聲天地滿、不如萬歲報山椒」

▼「55 仲秋釋奠、聽講周易、賦鳴鶴在陰」「縱使清聲千萬和、不用十翼豈高聞」

▼「176 卜居」「縱使門庭皆冷儉、不辭到老富鶯花」